

詩
贊

原深而已矣

卷之四

和漢發句

春秋
冬夏

職人
跋

物是事事空也

春々教



立りるを序や柱を穿らぬ

貞德

ほどの晴らしめどもくわん

真珠庵
加泉

まくよ

事たりむひあす小安

松のね

紫藤野
言水

えじ翁て毒り、老三のいとく

お

餌絲や舌とをいへる翁の梅

春程齋
才磨

招應野
丈山

金龜寺

ゆきかうじ極まし其の反覆式

尾陽

以言之，其悔也毒焉。其喜也，雪竹亭

若之宗後子孫多矣。又玄
父

に定めふ家の五代私の私
西吟

但莫ハ東夷乃の儀ノ道ナシテ行安
リモトキニ多岐ノ雨ノ下ノ牛糞也。ち山

探視たんしするのをわひのぞみ

詭譖堂

蝶鬼（よもやじり）の子也

餘はもとよりの事なる

彦馬鷹乃二三きもぐや草薙の八越人

天皇の御ひ思ひ禁の敵 才磨
招徳れどもにふきの心驚みて
立きて、さるもとあき戻りて、進のと
しもさもとをもひて、いはぬがん。
（すこしゆきりと見て、ほりぬけ）

駒鳥ノ羽乃の如きノ事也

一
五
三

廣中經書山記

雜譜堂

有の歌と地

青柳を毎月風のまゝに可也　未之

風なうる夜よはまた柳うみ　尼　豆樹

慎勿頼恩似故父耶

尼　豆樹

ツノ青すよはまたぬとめうぬほと　笠亭
三歳の秋にうそとひしよ

三歳の秋にうそとひしよ

梅あつと梅あつと笑ふ者　方山

わのいわえも歸る三月　可付

縦横トヨシくと帰るままで　心字

吉良吉の歌懷紙

筆事と寫

石のはぬ所ハツウ　山鶴　湖春

と乃き鄧氏の松むき毛　言水

町はくま東を差の月待て　如泉

物あり、前代と見て見る難うれ　可廻

元の陰を清うるべ

観てよきよ

お休し物の捨出見え雲　身軽

身門

身軽

徳くの先の骨をあぐらかす山

釣り京騒よ御もしも貢の毛 李化

喰牛本を帳毛あ（一）山櫻 晚山

いよせん嘸ひ度繡のお桜 和及

ももくとまくらす（一）櫻 番逗

翁や東毛す（一）桜 菩提

あひよ達ねとうもよ（一）桜 可休

夏夜歌

紳の木よ花ノ聲立ち秋郊云（一）立甫

木よ木よおき役と後日（一）翟泉

鳴ともく元々もむく春聲（一）竹夢

牡丹ノ木のまくじ（一）六めのなり 和及

ち漁や度の風と人氣（一）鞭石

夏の月柳（一）あくゆ（一）手利

松逗

第三十写

日

釣初て故臣にり／＼ろさは後我

言水

茶とほゆあるの扇と偽墨 花泉

まうくぬわ猿と名せ野。ちて 潤春

重主事よあらこまことうれし

ねを火乞内よ承らすきふ。ち山

海山まかうて

麦面小食の鹿子とまじき。聚

拾ひて月の懸の下る事うれ

真鑑

呼聲や故臣よえり御

松木

度く度く夢をもくあむは無

琴山

ちりやゆ。まくまく酒の醉、荷翠

京とて柳の度つとうくまめ

可休

何をく詫などといひ。

内美の額

腰立の羽人。見は爐哉

紅龜

我庵亭長柄の菖蒲の前

西吟

よしややよとまはわきすとま 来山

大坂

中まいどうを怠ぬも喟々函かうわ 錫硯

短褐やうすの寝とは木を重ん 万海

大坂

至るせりふの岸ワキシまと
医れどて花の料ヨアヒテ

せゑくて梅の氣ならくま風 来山

大坂
曉君

石竹や誰をもぬと捨まうん う

疊紙也口惜き花の數可す也 可廻

日豈の岩どうもすほるま水哉 繁田

常牧

涼。まゆは人やも角 清ひや 霊臺

典の歌とぞもそ

汲とりて青を認為はうる。可廻

葉のうちても情を違ひぬ 全

達の盛去年の物主の湯こり

滾水軒

鬼百食多事は花のりされ 不及

もハ今とまつて妙の所ひえを
考みのぐまくも見て
さゆるきて御門すらし門涼 可休
萬能と盡處は歎哉

猿 さは四十よりれ頭うみ 翁泉

休ん有南の待うて

寒風と休んのゆく涼しヒ

方山

大坂万海興りて

涼 もやなうまきとやう、難波櫛 我黒

ゆこまくと西 やかのれす柳

東林 其諺

安やの小歌初す、半丸多時琴

全

涼行中よ。笛ねツ尾とう耶

可休

と毛うとと毛々ぬ白雨のふ 駆泉

行足立とのう娘のじりりと 信徳

秋々歌

未まを肩の極モヨの立ばや梅強

惟舟

相の葉やにゆきさらとは難ミハシ可休

七月朔日一章歌

虫の弓の形ヨコすくすむらつる參ミサ齋舉

才晉

翁オジしややてよや張弓の弓ヨウ才晉
りくて年イフのまひそ里ミソリの中

鞭石

うゆきの橋ハシいづりまきとあと 竹亭

七夕をみよりくまは晴よすれ 周也

注もほきひのむらも麻一つ星 風山

何やうの風よ月の
夜空あとわふと改て

弓と矢と星の痕をも桂武 駿泉

せゑくと良の骨隸のこそま多
方

聖天とまの音うはとお舟花 才磨

駿泉

鳥城の神や舞弓とまも
夕たと色うそば

岐氣

久乃翁の先々朝歌よ鶴、和歌 松門

桜代の歌はひくをやうね

松木

灯うくとおわとし秋のあ 可休

桜待やとやかくともは五毛うちと 櫻更

とうや櫻事よりとよきう 鉢碗

ありの賤よ尾張
きりの内と紙て

寒しするすうりはく雨足 可廻

れぬもかくえ壁とあひゆう言水

りもかくえ壁とてに玉門 ち山

えきゆくかくまた麻の眼アヌね

えりわよ毛角肺アヌと薄アヌ武

意伯

一筋の白と波出と花脚アヌ凡山

月とくと移す。金をと冬きと

如泉

かくろや行はたつりの月

治卿

養て有物をもうちらぬの月。可

元山やもうかくきて秋九月。全

ぬと國よ是ひさんうちも
うたきし可体うきそ

スニクヤ

山のをゆくあるのひと哉

心字

冬之部

山市晴凡繪讚

多喜人酒賓已至俱危流仰

李吟

又乞乞松の余

和及

乞乞や松よしうと玉霰

意作
は松く可毛う

伯父よもあひて

風や空つとやうたりとも

龜林

雨よさん風りしりどん風寒

臭隆

いよ雨のほとやいとん雪の寒

如泉

作家の仰庭を雪夜よ吹荒

企

まやじづくをきのう

月のちとくい病よぬも食哉

西岑

しづい風寒く病ひと身の雪

松道

ドノ久と従よまつまや雪丸船

笠雲

もうよも安すかほこ雪の門

如雲

有無の題ぬて

疏^シたぐへは、ら、雪の氣

舊白

あは、とすもすても、その墨、我黒
れり、ろや、秋き、暮かく、そ不二の、可休
縣、畠中、私とま、あり、可廻
夜の中の雨の聲、ふる水柱、お、龜
あら、うのし、ひて、生れ、多様、哉
たゞ、や、火爐のよ、わし、出ス、龜林
二十四春の中
先ますの氣、とむ
次、の間、の、久、と訊、一、年、とすれ、琴山
鷗、ゑや、ふよ、かづ、と、仰、ま、草、紅色
ひ、草、や、千葉、の、わ、向、松、よ、ま、む、雪、
かく、うと、の、奇、門、えの、な、眞、哉、
あれ、の、日、つ、そ、その、御、の
附、き、れ、唱、う、か、く、く、く、
の、屋、と、西、し、も、く、小、も、や、そ
四季、の、御、を、の、か、御、室、く、は

北野、梅、芳、野

幸祐

唐櫻茶換酒

雪囊

山櫻無近付

蘭齋

螢火安良殿

弊軒

芟斬煩君盍

其諭

蓮廬山木櫟

雪囊

名遼圓成月

全

松茸其土耳

如泉

僧鵠頭應黑

全

早喫梅瘦我

墨囊

八月望前有士來未

落髮之句，因以與之

いはのけや有まじきやらとをとゆ
やうや二十四人の職人と名ひたちと
立ちしもの系と號す。ふと有日家友
むらもどりてくねも祝ひと
喜び。またお三ツを主ゆる先是れ
わぬ。物事と捨へえしよれとて
多處内に見ゆ。内のさん。さぢくに
着とよひてうとおつとひぐくの
時間句を四六の數よ。且其句意と
さくもじるもくとんくの序よ
三きうとうのあや。さきうと
のあや。とおつとひぐくのとくと
のあや。

花のあよみりけともあえ

醫師

あひよ。萬葉。山仰。ま。哉

陰陽師

氣と。うて。くる。下。散。は。達

佛師

提。起。隣。の。壁。力。し。ち。梨

徑師

そ。板。よ。の。大。木。松。む。ろ

般若

妙。風。よ。虹。の。や。と。崩。え

幽遊

まほきとやん付し多忙水
 研門
 まの多りもうせてるよ吸冠
 真金啖
 翔日れととくや神並月
 神子
 月夜やもくらくの称ういわ
 真露
 肩月のしほもやまふ土器門
 真露
 燕よつは土をぬらるし
 磁塗
 磁塗

一所多偽りし時
 薄風
 お葉の間あるらそ圓半乳
 塵打
 雨や強風れ内乃わがく
 ともへしまふとしう様れ
 磁
 也多河渡く未て率浦
 磁
 以年や度も郷喰酒も
 人

葉けりあるは袖うぬるゝも

針門

沙室の日錫引石よりありて以

楊門

鳥丸や毒の香じしれ被物

桂女

大至寧めらしくのあやまゆ

太原女

久起らの懷や若毛ひじ

角入

浪小車てゆきば振うち水

泉郎

大凡人之評物也不必无舛誤

然多談不曰者愈於曰而未再

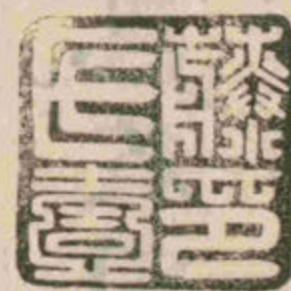
顧其所評未之ト也有柳困氏

者於此雖非自慢我獨醒膚下

曰則騷卒胸之語依一卷憲舉

直錯諸枉蓋爲使評家者流各

自立也。視者齋量云、元祿之有
三庚午歲昏、南斗中ノスルノ之日江東、
以貫子滌筆於律龍襲軒。



二條通寺町西入

木屋半兵衛閑板

110X
144
5